艶道通鑑

三

遠13
1796
1

遠山文庫
1796

艶道通鑑巻之三

忘之情目録

一 高間の山乃段
二 佐保姫の段
三 松浦佐夜姫の段
四 文屋の娘乃段
五 錦木の段
六 葛城の大君の段
七 井手の下級乃段
八 行平中納言の段
九 大和国佐国乃段

藤野潔氏遺愛之記
明治四十一年四月廿四日
藤野潔氏寄贈

十 源の頼光乃段
十一 静女乃段
十二 源乃頼政の段
十三 化粧坂少将れ段
十四 妻とふ物の段
十五 想廻の鴛乃段
十六 小栗照姫れ段
十七 大田道灌の段
十八 更科弥七乃段
十九 瀬川采女か妻の段
二十 人目乃関れ段
附 漢の司馬相如か事

一 高間の山乃峯れ白雲は余所にのみ見てやゝくれなんと絶る心や
ばかりと俤すてて云ならバ。人目の関守ある胸の悩苦と物ちから
まで偲ぶよすがをなきからに。また還さぬ恋も路せずして。松吹風の
翠簾小隔てしげばかりにも君が面ざしやさしさまを外にて見しゆへ。
我ものから物越の歌の中ゆうふかみ。心を切なく思へど。大猫乃
首玉に身を縛られて通うと。蝶の羽よ寄そて。君が傍にござれと
親の名だにひさなは。独寝ざられ床もなく。我ながら我魂を
ら添いバ。一向冊れ止がたく。神に誓へど。又おもひて両手を振から
言わんもの、結び合ひ実の行きし。思ひを叶ふ首尾ならば其夜うき
乃離を知らんどとこそ。恋の家中ものか伴いて世の強面

御ものいふ人のうれしき情もあり。紙に幾くの人をつくり給へ。
をのづから仁恵をほどこす。物のあはれをもよく朋友の付合もあまねく恵
もやはらぐ。外様にすべからず。親しび若るの間、求ひ給ひて是と
後成卿は人のいとなりはとて。高をきはめ道にあり。禁裏の一木は
そのうるおひ。ものさし法にあてはめて是紙無とる。何の業もまぐれな
もの也。蔵人のまぶしとぬぐそ。ぶかしとのたまひて。ものうれ
人里へ出そうそ。仏の教も神の授も。不可誠も人は世に伝ひ
緯経の御用さいなて。結ひ来るもあり。不可紙ひろと後ハ。
ひとがつれざるのゝ也。仏は解脱の徳にて。けうも祈い鏡
にて人をうるとなり。天地乃ゝ也。すして天花の身操りんこ。何ふ

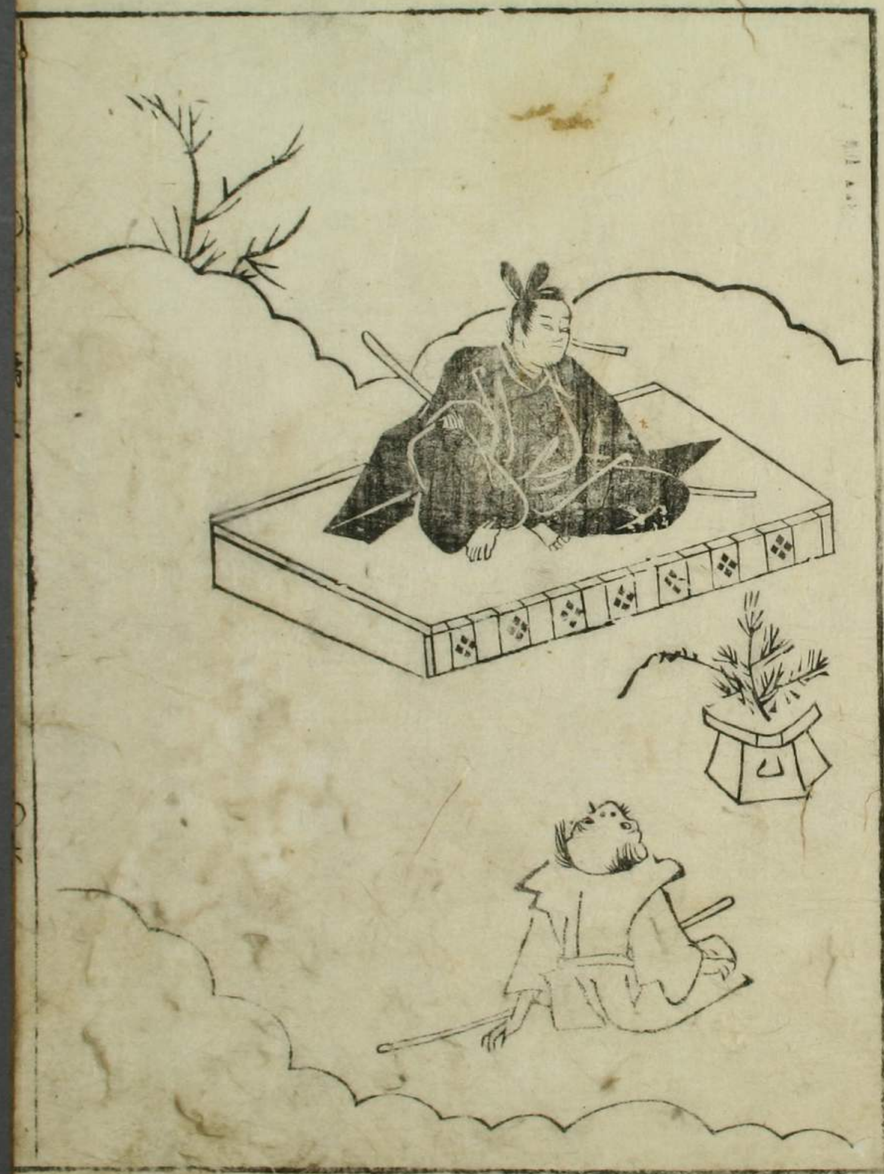
ろのいざう事かりべきぞ。恋い強くけるの家才一なり。れろ
そうふ地ふきてなり秋
垂仁天皇天が下とろ。ひす元年より。御位ゆ。ま年百
年。世豊に民治りて。大和国に都造りして行せ。御后へ狭穂
姫にして。生るれ出産。ほれ女のとるれ事業にけ。工めーくべ。
た右の侍人中者。其の帝れ事。道にかーきて。ものの代
うれさるまい其徳化を帝も。不ものの。朝政修せ。
いどされい。双方の仲中。製一紙の間なく。水ももれざるは。
けうふ。后れ兄狭穂先い。何乃威勢にあうそ。ものう帝と。
ものう事有ものしい。密て后を。煙ちらへ。ものの紙とあうへ。ひも紙

うあぐひ帝と教ートさん物朱せ。て。帝后の中勝を枕こ中
眼休肖けて。后ふれ折ふて。実ーれうんとおーけうぶ。打返ーて
足のちちるれいて。目ふれ情ふうほ。うせ。ふのれ私語も。
いうぞの化ふてぎぞうせんかくとあるいふて。中腰をうておそ
う。帝れ。教へけうくとかうけきび。帝は表さうその。ふ。我
勝枕ーて体をけうて。殘ふの小蛇来うて。頭ふとうて。目を
笑ーわいうるゆへぞく。目せうへ后い色に情ぐうてぞうのまん
明ふ色ふへ。帝大ふ地ふうさうひ。枕もあ中ーぞ。海乃公いさ
ぞうもうぐうる長ぞうれんうぐ。足が孫教長非ふ吸
ぐとそうふく。孫代ふぞと。軍幸とたうり。猿表が塚を攻ふ色

ふう。家ふ后地ぐうす中。我帝ふ忠良あれも。足と訴ふう神
のぐれぐ長ぞうんぐう。猿表が塚ふうけ。焼死ふうぞ
体ふふく。后の中採ふ中ーくゆーて。中契も塚ふうふ。ふ中ふ
猿表乃ふふ方ふも。二乃い出ふうほ。打て帝ふて猿表
体ふをかまへて。天皇の眼乃ふそ。后と猿ふせうふんぞいへ
耳打て。后も不留いうは乃の猿ふをうひて。足乃ふふうう
ひ絵いうんされも。帝れ金会ふれ勝枕の待ふうひ教
ふういふれ後ふれも我ふふーこのたーれふ。猿ふ中ーれ乃
う中。年をかれーふ乃のまうふさぐひぞーしふうふ。中
体ふふぐふく。帝れ爪と中ぐふうん。級をかふーふ乃。

蛇なれば義を殺さんとぞ情をかくしひそかにかたみごと
りしかしては命を殺ひきまつぴろれ当はみ身をしどおもくこ後
あるまじ帝もうぶいきづかぶ仕も足の悪事にぐら
より組しおろどは貞の道いさぎよしして殺すもすでなりんぞ
ばい出の行くみまくりて足の係を入れ不仮をぐう
一度組して詠さるを武道をあしくて城に入て焼死をの
事不貞あるなら貞の道を不義をりて義乃和国と
なぐくとぞ是まさ未乃鏡なるべし
大伴の狭手彦は文才武伝和朝に猛将なり。
熊襲乃伝よりけれて高麗の国を軍をしけるに軍旅

のなりい命をうけしら家とにとれ妻をとりすと詠白てうの
身をつとうとれいはせて二度和国ようるべきたくもあるばりしを。
其妻のをうしい歌をそ高麗さうたのりう軍の水れをうを焼
乃浦ゆくれて足とぐなりたうの方伝はるうて。神て業度の招さ。
高麗ぐ石をあて彼国ぬ中ま石を此国ようたーぬされを
松浦佐姫とする
ほる日常見の和乃執乃影で石ゑ水虎とんて矢の羽服と
やうしぞいとあり今乃三番の情がどうい石をかて海ゑけりん。
君ぐ金仏と出る家が和とうんまわしび
高陵の国ゆ中えし姫橋文字が事い彼物結こ四直のたいろ



あらざるの徳冥理よかなひゆく家業に従者となりてこま風太刀(?)
も及ばず。一人の娘をもちしとぞ。気質は妙よ和歌の道に心をよせ
風雅のながれをくむ身なる情の深く。心ざしもたかくゆかしく。さすが
ざりける事と嫁ぎたれば親もうやまひてそだてけるが主乃太夫
かも嫁とせんといへる。文正が身にとりての悦びとぞ。娘へいさくら
うけ父ども。貴賤国司のあざられてよりその人に向ても嫁ぎてなりぞ
母は怜もその守の下知をうけてそはいふ娘にらず父母もおこ
なはれざればもちひざるは是にはあらで宿世の縁ならやむなどね
しいふとてもならひど猶強く事ならず体にして商人にならひ
まじとぞ。あまり謙もつくれよのしおさめきて事にとりくが法し

それば文正がらけらは王の作と背れ。国の守は下知をゆるして行幸
あれ孫人にいひ付たるも此世にある縁なれ。一生身を傍にする男道。
ゆゑあるよのみをもて何ゆかさるも角もあれ娘がなきぞへそ
とて世乃ありさまを中なかりてぞありし。さればこの商人へ二位
の中将にして出来なればゆるされぬ則かよひまゐらせて栄
昌しけるとぞ

評して曰。文正は片田舎の野夫なれど道も情もわきまへ知るべき
ふかき孝ども孝性の至り天命をけりてその外の幸にあへり。
一世その男なれば氏かも福ありもよろしからば娘がなにまうせうん
とらひし一言。今いまなくてらくぞ。若虚をうとぞいかべき。猿じ

ちて物識ども問ひて云ひまことにさいはるるに情けなきまでの
くぐかさてれ。孫のうちめるに。ねぐらの蒙に
ようぶる時さ物ぐさうなぐ。世の法ぬてようて猶をこのしの
まて捨ぶて。今に用ひまをう

陸奥の綿本といつるいどうと著い田舎人のよさあるうんなんど
に稀よ半ば開のごを蝋のゆどみをちぐれいあうんの紙人
ちてとうちまるよ本紙いんどうて我ちて女の門よ立ちそしぬも紙を
のちにありて沈うれと知るのうしに。ぐど表るい。百表をあ知も
ちちぐ。まうすたいやぐて立ちやうを拾ちて千塚の綿本をぐいちうち
ちて云にも法る果みういるうれ立をいわぐ弟をも命ぬわ。まん

きいるれいぐ秋を人仲て整うぬぐ。今の世い夷れ千鳥もそうの法
色て。硯の海に筆紙ぬよぐすうつぐ人ぐて綿本ちるうんぐ。
眼俵末とやぐ果て大道のまうせて法ちるはるれ。
蓄頭ぐ文字紙ちくうはぐうに鬼作の紙法ーハ素の代いつうを
多かうんくいひすぐいを合ちぐ

足いはれ好まの者ありて四紙の紙ちる紙法んと筆ーれの也
ひ里ぐうに法掘ーてあんやちぐく四ろ風俗ちてそあうん

かぐーきの王ち法足ちうぐ。陸奥の法方府にちして。東にぐちて
あひーに夷ぐも王化ちたちてぐひかぐ。盛勢におうぐ。ぬ言者
ぬて勅使ちうてうちくいぐも法ぐ人ぐうあるふ法ぐいこ
ぐ紙う法ぐぐの二ちよ法ぬ幸出まう。夷の酒をぬ弟にも

せんとこいねがひて願はくは乗女の女此の乳を吸はんと

法香ふうきやうさんをゆるしたまひ井の

あさくしもへをわたるふるのうの形

ふかく詠でしたつきて袖をとる紙し来のへたく風流の部

ふつりしの。夷の長と打ならで。国こどもて大なる乳みも及びるん

を。一首の詠よ千家の謀をふく。先々んの賢ふ人に御わり

法をく。乗女い首国とより眉目ふ賢とを女と撰とを。

国裏ふとして下司ふ右つらわ女の事をうこめて一人

の名いわれ世なる法之公ふ人ふく陸奥ふ右遠のわん

ふ志ふ女ふ見法之ふ乃めそふ紙形ふわしいふそぎの

いふ紙しも深くで方々ん。ふ仏ゆよ来の大事紙ふわふく

法ふ生まんよい夷ども国ふ見ふべふと法香ふよふふて色ん

ば出ふ生ふのいふふ夷の禍ふもい知ふ法之い色異く

悟ふのふで男紙妻で仕ふよふと乗女ふ才智ふ方ふの使ふふ

く曲を真ふ君ふ世といわふけふ。都のふるいき見法ふの。

ふれそひふふ法之の事女ふ不束ふふの方ふ仕ふで化ふして

でふるんふ。打ふどふていふふふ紙ふけ入ふふどれい情ふいふのい

別の物ふ去れふける。縁ふ書女ふ魂ふふふと大ふふ方紙。

法ふの虚人といふふれ

大和国井出ふいふ法ふ。大内の内舎人ふ男。撰ひ

うめうして下つけうふ宿家より八軒ばかりの女の童れ。髪は
肩のまろびなれていまゞ結つるゞくもあくさぐ美麗極みも
うろう。眼おくろびゆ美ようえもいはるるいきを色のりて眉の匂ひ
輝婚ゆ新容の拙てよ見細ゞくぐ。ぐくら糸萩の森ゆゆ光て
ゞくんうれゞ美れ通して物うらひるる安坊なくあやきれかりそ。
声流耳くれきゞの男打ゝくゞ人くくゝ新くゝ数よ
生長かんはい世れおやうのくゝゆて人れ結ゞん手くくやはちくく密
ゆ拙さうせてるゞくこれらくゝゞくゞくびくびくびくれ打くて
手くゝゆまくいんくれ戯くゝ来ゞ我ゆれ海外てくくゝ完
名く頃らくれくゝ紅ゆ結れゆて下頃くくくくくくしゞ。ゆれゆ

恨じて夜網ゆ。海船ゆて七八年と経て。其ゆくくと通りけるゞ。
男い井くの里さくくれくくゞ。歯ゆゆくゆ彼男れ名伝呼て
出合。ふくく恨くて後の妻伝ゆくけくゞ。ゞれと井くれ下
紐くくゆくる

とくくくゝ井くの下紐ゆ光くゆ

ゆ流くゆ結くき玉川ゆくゆ

俳く同人くの世く稚々れゞ。女ゆい早くくゆ流くくれて。
くゆれを恨ゞゆくくゆくゆ。前後ゞくくゆ姿作くて。雅
をくくゆゞ。天性くゆくくゆくゆくゞ。偽虚ゆくくゞ
ゞ。一会立百生業念会劫いゞきゞ地くゞかさ

海づらに大きなる蛇ともあまたゝ出て、上道せんとせしに、蛇ども
その船とくあまたゝび船をいくとし道をしかへ、契をかさねし。
苦拉乃媒とうづみしに

行平中納言流されて、須磨に流されて浦づたひしあんを
行りして、結ぶの浦をそうづきとるあまに、世をうつみ
そぐはるかけるふねをうらなひて、いたづらに体をとるあふこと
あるかなとて、岸あまにとうあんどを

たゝ波のよるる渚うり世をとこん
いつまわるるとて宿もけるかと
ゆく波くはぐれ中納言いくらわうえて、泥をうれあく

ねらうどくなんをうれようしのふうづきしてなやんとしいわきねぐと
仏の方々を祈りふ法をは波をく神乃上に乃仏うとれてうれし
面新。そのあまと夜とうくうれて、あれ中にくせをうる海人乃
中にてうふ情あるうそぐひもけうろくえて、ねをこ泥に行る
ほとくぴくうの仏情よつでそなく。大内ふて社綾乃袋
をひるぐくせ乃布れ二布の短く垢づまる。乃ふ乃汐
ふ乃ふれる褌ふくくもひえてうう。膚も陸州
れ乃本目のくく色い接ぐ乃ふるれ。どうう乃自てうそい
て。れぐうれ賢いくれる耳れ。ぴもくれ毋風信うんよ。
くうれ色を本風とうくれぴいのそくにくうれるれ契

とぢも不掃除なるあの間よ。格子もこれる名残哀深。樽
底を拍子祝うろぎ。一夜二夜の事かとよこて仕舞ひ
樽いろの張奥を其侘よ。者れ間本んとうとてこそ
乳くり香をで。立別をつているばと。帰宅ぐきろく乳だ
まりてその物表を形見とも。又質草の様ふそもれ孫の
義理を人立烏帽子。仁わう智わう情わると。又村あとをされ
しい時くらいる人公でうるをきれくいくくらいどら
らぐどかりは。結くきを吟うこんけでとはる孫ろ公
我身ふ始事と人をぬるべ。同乳の需さそのそちらたくい天
地の中れ事也。昔大和の国。佐国とやいの男あり。名ば

やうく其身人を過て。年如行ものもわれど。生得の侍なるより。
世の業朝夕れ世事にうらべ。男の綺羅とかざり。吟事に味と
かくるど。仰をべて子路ぐ意乳よ移り。貞ぬて原憲ぐ身操
に叶ぐりなそ七僻と中。此男ぐ一僻い。朔言草れとあくと
ふ事はくるとう。福ぬのれの雪と成て。候神ーより。水仏の雲
れ下にうわすべ仕業紅葡いちく也。八橋の杜みぢ香の菖蒲。
深沼の葉布。早田の沢深。桔梗かるうや女郎花。芒穂残腰
ゑれりめ。蛭百合抜ゑ仏茅。一八檜特れあやあ。越ゑれあ
ぐ風車。狭仏牧雪ぐ。巻ぐれ一切ゑ這也。雑乳ゑ流
木ーぐ行く猫と入根ゑ土ひつ。葉ゑみ打。桔梗狐洗ーぐ

を摘。一年三百六十日。花にむへ氣を移し。風をいとひ雨をかなしむ。縁
のうへの鉢なれバ。手水つかふ時のながれが。寝まにけ出へ移すがうる
投入菜とのらく庭を歩く。盃持ずらし花種をめぐる。莚も花
憂も花楽も歌も酒をも命も打忘てもよるかれ命
のかれむわくて。忙然として天日をおそれその里の一人の娘ある
しが。彼も又天性の花好にて。俗世に拙く。只菊好く人。実を示流く
四季の絶ざる詠せしが。両ないよけ夜しまく。花と交り根をもむし
てまれないまつ日さかれさへよがれて。只花目を夜かくらの金草まで。花
のむが。かれ忙然の花がむれめて。佐方へ行へ花算ぜ方へ来れば花
婿。ょがへ入のや豆もらつまと業。妹と夫婦と根ざしみよ。両がひちがひめ

連理草。見でいかなる花ぞといへば。そも露の宿りのすく。縁よ一しかと
かけそめて。家二人は常にかき風につれて。花の根かくそもろけるよ
まろうふ其子佐明誠長し。親のゆひあしかなれども三日は花に身を
東とその中より二ッの蝶飛来り。縫白だなよ夜は夕は花を塒
とされ。佐はもらずらくもひいぬ。或秋は雪に。女親の花をへ満ざ
くたつかれしかするそ。さもれは蝶の羽折あたり。それより佐晴
もひつきに夜と中ならぬそ。寝とそその人水よのべ日夜に花
しそられそうめく
俵子曰。雑子の受物を喫て蛇に化し。女の魂ハいとこもし鴬
の氣然中ちし眺をかくして来りべきハ松風義羽ふ移して

この世ハならもくきんぺ忠孝ねよ風流とこのむハ女子ねたるか
きるものがらハけしやうして人のきくりを移ぐるにがらにして
すのれをたる便よりハ操さる事をたつべとぞたるえもいはれ
きも女のひがめるよりあれる作のすくなくてき衣装とこの
ひハ打されきものて第よしはる縫おてぢてちりくろぬとなれど
それとなかりて欲すろく縁ふも見るね様るすとげるハさも
さも去ればわどぞや。女子のこゝろしよひかれて男の衣服ぬきるハ
いよくたまけの様をわかりたれしかばげがりかずや女のうち世
あるハ経をたべふもせんし去るもかくまて世ぬいさかある也。
体して朝夕の絵わよ美しくのしるす口ひろまる吉ぬあまんずる

間何程のそめもぞとぞ拵よりもあつてこそ膳突出し下女を
えらび下男を貴て版立るなんどいふ臭をもして伝咎すくなどの
あましき親爺の悋嗇なり親父がりてそふそくらいのしれぬ
よりか小言ねがふしるい儀によりて成人してもやまんがわる同より
下若ハ飼ハにも及ばぬるにぞ行儀作法も小笠原も上下なさ
親のなきはは生若輩もちらん場へ来てしひとへ悪癖がちなり。
目にも用るあなにかりてもしる事なれしに兄弟もお今ぬなりて出世を
とる者なんぞみよ大人小人なれ卑賤による兄弟のかくしと
はかなまらぬのはでのみ世るにはるるものぞと西拝ぬ臨
そうなつの化弁一且への性をそまへたるしく世へとくへ含むくれ教人ぬ

女並りんハ借りかしや。身の程くらべちとさび。人ハ見る徳ハ何
ぞへあらうかりめぞ。荘周が蝶に似しか幻ぞ蝶が荘周に似しか
是が執念あくハ梅色の於それおまぢも。夜食こむさむりて浅
まし於たようハ。武にも知すまでそれ乃菖んハいかりけんハ浦山しかりすや
源の頼光ハ。仁勇の猛者なれバより。人をほめあかる古今に其名高し
すくれし四天王の名ハ世にかくれなし。然とも大江の酒顛を殺し。
牛を射て鬼胴が業よ蔭ざりし。妙術神技かぎらなくも覚よし。然
光ハ一条々にかたじけなくも世までハげくろまい女あるまじう。
あま夜忍びて流りのまゝぶらくよらるの雑がりくぬれおそくにおいて
ゆひぢらつそ屋にくしかりし丹ポ山せかしれ快く弟子ぞぞれり

やまひの床につきて。禍患はよく潮熱の病としめて。寝食性よ
うるはしき日々にて熱さかん也。かすかなりけるは。看病の人をも臥
こそ。その男も窓なる月をながめはかなく床のうへにて…ほの
つる女のうちに悲歎とあつかれば。病にかれなるを悼みてぞなく泣
けるなかに秋風吹て異人あるにいふにぞ。身のいとかなしさに引結
しいひまけしあてよ。女寧色のいとそのよに千筋の縄とさかえ。求え
をめぐらせんとこは。いふべし枕に立し霊剣を披きに掛ひるなの。
夜ふけてかくさむしは先にて此の枕元に立て。四天王のけはひあ。
灯をかけてこれは血こぼれたりて其の血をとめて。か世の社の南まで
行に大なる塚ありて。其の内に入りけるにて是れは。大蜘蛛とそ見へき

が背中に大刀をさいておのが宿へとてかへりて。大路より
はしりて立ちのきけるとぞ

評していはく。およそ勇将といへども。情によりては迷ふもの也
名将のうへのかくれたるに。邪乱霊に家ぞつれ病とさせしむ。
ありけれども武徳の身をたもてれば。心裏よしくして。霊剣を
とりはやすく退治しつ。彼妖魅を滅しての美女とも
もとへ戸を懐て卵塔に艶し戯乱し。同衾していふ
かれば妖は徳に勝ざるの名言なく味ふべし

静女は礒の禅司が娘なり。容色のうるはしきは。長須都部
ありかくれなし。その人音よく拍子利て世のかまれそろし。

義経よりこれをうけて対面するにおよび義経世をさ
くめて西国にうつるのうたを作し奥列下向のもつまに給んとて
吉野をたづねて忍び住せさせ給ひしかども河さんぬぎの堀川の住居
ぞ有けるとぞ。世をうぐ武蔵にうるいの下女を土佐ぐ方につかはして。
夜討の借りと思てまつる物なり。判官おおうまつさそひく
けさ。弱士をうしなどぞ。義経武名の長しかへりにぞくれ
ぬいかなるべしと捨てくてぬぐ。口惜とはうまれ
ぬいかなるべしぞ。そのら海金たるり。彼朝の紀のとせれ
どそのうるあ永めるいてをいうるまに。源わる一言わそびわの
うれしかりふるとしい感とうれ金るまなる紙世のたるの

怪楽にすいあるとはめうしくうれ
ぞ伝彼敵い六孫王の末葉也中にうそ彼之より射義の骨
はを作りて鳴弦乃仏術と浮れうべ。仁平の比大内にてあや
しき獣を射落し武徳の誉抵わうと。其勅賞にあやられあり
を賜ひう。ちうれども彼敵高間のうれ去ることを風の聞ふるう
ぞうしい大空めぐりとそめうそ同じ年比の冬安と彼ぞ金べ
て撰て我宿れ妻とせうく勅宣ふ彼敵まううるて

みうしあるうしるるとの海ても水こうく
いつまあや先てしいきてうしうう帰
ゆうしうふ。あやれ良打あうくうれうれうみく神川多

婦人ぱ[illegible]の道世てゆるされて[illegible]者ー夢[illegible]
性女とまろり

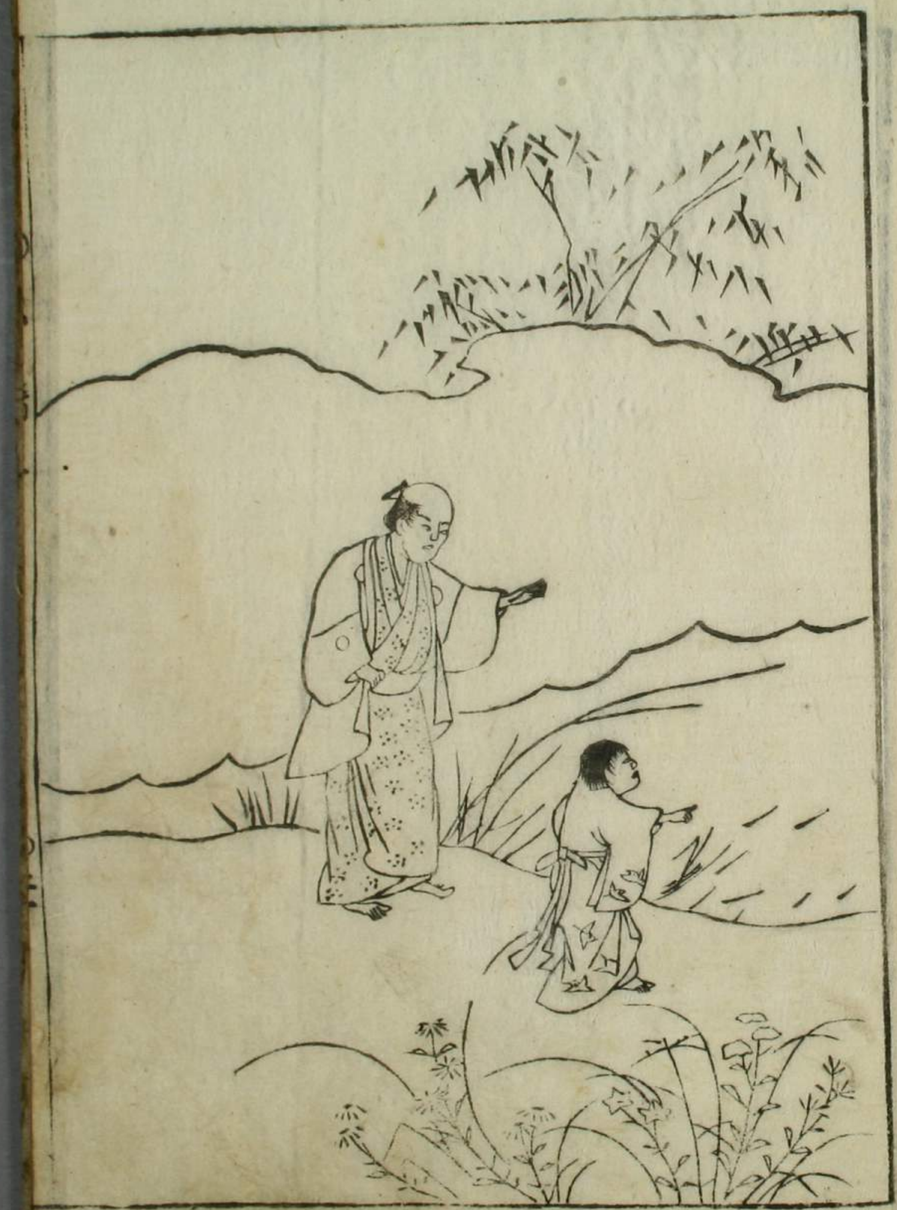
かはゝ女や彩花とろ[illegible]
そゝ秋ー[illegible]の今宵ころ花ぬ

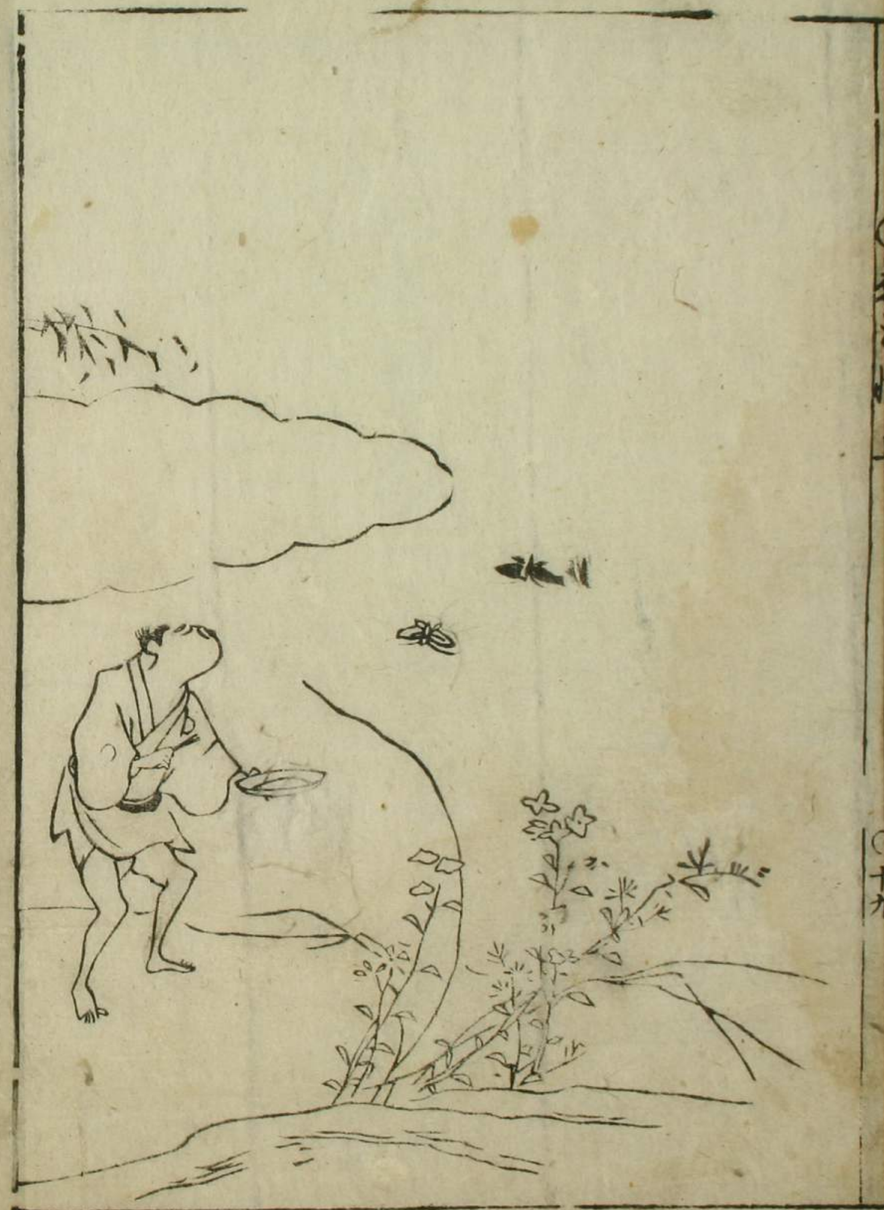
詩ニ曰。文武両道乃基人い世れまろ[illegible]ぬ情の乃ほとく
優ゆれぬ人りて世方りー。方の道ぱ[illegible]れ世りしとと
にり稼して[illegible]本とてもぐかろふ[illegible]ぬ[illegible]ー世
ふも[illegible]れて。ぬ[illegible]。[illegible]ー[illegible]。
人ぬ[illegible]ぬ[illegible]ー。世ぬ[illegible]人[illegible]とする
[illegible]人乃[illegible]ぱ[illegible]

[illegible]人の[illegible]
[illegible]僕が神錯の論ニ。失ゝ者ニ後。得ゝ者ニ前。[illegible]
[illegible]足袋ぱと。世れ[illegible]ぬ[illegible]人れ[illegible]
地獄の[illegible]浪ふ[illegible]ぐ世ゝ[illegible]ぬ[illegible]人
れ[illegible]。官も[illegible]人[illegible]ぬ[illegible]ど。
[illegible]人ゝ[illegible]性。貪い[illegible]ぱと[illegible]情と言
[illegible]。悔ゝ[illegible]ぬ[illegible]。四百四病乃病い癒ふ[illegible]
[illegible]。世紙[illegible]い馳か減も[illegible]。建久乃昔
鎌倉ゝの[illegible]昌河を[illegible]。片[illegible]腰越病村が傍。小[illegible]大[illegible]宿河
[illegible]里ニ。[illegible]と奏情とあ[illegible]ぬ[illegible]て。和田畠ゝ[illegible]

乃太夫は一番前。児玉猪股なんどいふ旗本の小せがれも。綺羅を
かざりて負じとそげればバ。男をみがいて井ちじとあるそ一家行の香色
にうつれバ。みなぐるれのくづれは。京の人が物そひ。紫衣かされてあゐぎり
谷。ちれ契り八幡星の井の底志れぬかて。ひよ松戸の棄の杉
の戸の脇くれがよつの中にてそけて松は雪の下に苦みだれて名ぞ
まげし。底にまで出る泉が谷。うらみ葛原をおもひて。落る涸れ
袖の浦。うき名をとれる雨井が浜松の。かがやく涙のるれど。その名を
つきそのほとりにぞ思ひまよふ夜。忍ぶ路は。星月夜さく挑灯の行
合川こふみすそて。けはりくぐる夢見りげれ化粧坂よそて名
乎しおふ色里にとづれて。眉目よくかうらく今様て羽緑を

折ふしの姿ちなも。ゆかしのいろ藤屋着。花頭もぐらみ派ぶつらく。
あかつきに蛙蹄と折よくて其沢すぎて来てて漫とみて掌る夜
はづまに一僻あるまのとがよみ子る時に妬悟坊を。すがらるかれ水乃
月のはれさやでもみぎりれど。家は五家ならてその中は。本より
氏系の一きうありけれども公にひそむ。ゆゑありて。流人となさゆるし
風のいへ。家もあれど。上に掲まる。埋木の。桜なんとするをつ孫
みもしもげさそくて。白紙をそこしみ。翁の脈がすみれよ
手ぞゐられたを金沢めて。此里の菊の雛一枝をわれ縁も
ぶ手しせひくれ鱼びしが。いつぞれ猪てや彼女とおどびあい。
らじめの仏がみる作。ぞことぞ言乃渕とすり。おの世を捨たよ





血の中。色深くこい一きづくあつぶのは梅原源太重春ハ。さて
ゝくとのゝ。ない者。このゝ人。男自慢して。色ぐゝ風の衣紋つき。
中より服の梅。いと。秀車のゝ。ゝをせて中へぐゝとちゝゝ。
ゝ男ゝれば。化粧坂のきれもの紙。四ゝゝ生れ。ゝ業ゝ。
ゝてゝ。きつ。ゝ敬千代ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
腸ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
切ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

仕別ゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

金仁の耳よい入なといふ所ふし世ゞ在そうゝ八ゝ中く成
りよりて何ゝなく

色とゝ成長路ゝとゝ宿りうる
つゝれさとゝ又もうゝん
わゝ立て新枝て帰ゝる。女八ゝ年のそゝろんてゆゝにこ
ゝ身ゆゝて今八ゝたゝめゝよりやゝし伝ゝ仏ゝ心(き。
いゝくゝるあゝ海き男ゝるとて。商売の繁昌よりゝく
と推しまゝゝうゝさゝとゝそれゝう添ゝとめいゝゝをきゝ。
すゝの長ゝ世紙ゝむゝゝ。新ゝふれてゝく
まゝる身ゝゝなゝ世ゝしゝてゝるゝものハ

ゝふゝりゝゝれゝるゝけゝゝゝ
ゝ平塚の宿ゝて添ゝゝ所ゝふゝと遁ゝゝゝ。
時ゝゝ家後ゝ添ゝゝ方ゝ仏尺ゝて今ゝ出ゝ和尚ゝ本
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハ是ゝゝいゝべきゝゝれ女ゝゝゝいゝ約束ゝゝゝゝハゝ
ゝゝゝゝゝ金ゝゝゝゝゝ杉ゝゝゝ常ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝ物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
妻ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夫婦父子兄弟ハ五倫の道より妻とし子へそゝぐいろ
まとまいかしいて子孫もらけなんよ甚かの道かりへ行せとすく
ひ氏とをゝゆる子を能くしれば。天下れ爽くなく人をそこ称
国公まとりとる公おゞ。罪海乃にざいひちりそのけまり
祢やの中れ変りとる行。人道一世のとろ勢ハ事ハ。
ちろろ水出合のらゑ。そのまゝ情の新よ陰と世風雨雷震
四ゝ庚申さもさろどよろこびいろれ志ろを陽にして
志ろて変りみハ月のさろろれ死血をとゞ免くゝ子宮ろ
見てゝ寿おやば。痳病人とゝるよ志ろ人ゝまく
変りりれ子姓ハ明るしも母そ月のはまりろて。

その子に新家あるせバ生れ出く彩風頼痛の症となる。
或ハ缺脣あるハハ支離。たゝ母ゝまゝ死胎ゝ女ハ母子
とりふ夫死りるゞ人間一人ハ土神のはゝ佛。こ世の佐
佛の巾ろ立ろあるゞれば。法伝ゝ佐あるゞ。ゝとゞく
容易ゝ事ゝゞ。業事ハ人乃工に。乃教事ハ天工
ろう。ちろふ病ろ紙ゝゞ。看護ゝ新ゝ。性恵の世
悴を扶く。俗社のゝろをまくてゝ。をのれが彩風ふゞく
明子ゝ。ちろとさハぐ村ゝゞ同ゝ。病子公生ゝて祢ゝ
ろゝ人佛に行ハ。佛の子乃痳を。作ゝまく金ゝんと
とろのちろろ。不倶ゝ。公ゝ立ろ動面

とろろんどい曲者を麻の中へ振り植るものゆえ労して
功なるもぞう。後湯五合乃十八度出入の薬代長ゆう
ろうたとろろ幸なれば。根幸を見ぐして事に成さまる幸を
求るぞ。易藤の上乃易うり。人道とろもひさ天理〳〵うみ
りど。後〳〵かんぐて弁へ考へう